

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月14日現在

機関番号：33403

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730636

研究課題名（和文）ICTを用いた異文化トレーニングに関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文）A Theoretical and Empirical Study of an Intercultural Training Program Using Information and Communication Technology

研究代表者

加藤 優子（KATO YUKO）

仁愛大学・人間学部・講師

研究者番号：90570614

研究成果の概要（和文）：ICTを用いた異文化トレーニングは、学生の異文化に対する気付きと理解を深めるのに役立つことが示された。新たなる課題としては、オンライン学習への意欲を維持するための教師の役割について明確にする必要性が明らかにされた。

研究成果の概要（英文）：The original intercultural training program using ICT was effective for improving students' intercultural awareness and understanding, while new tasks for teachers to motivate students' online learning were suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：異文化トレーニング、ICT

1. 研究開始当初の背景

異文化トレーニングは、異文化環境下での目的達成・良好な人間関係・意味のある生活を可能にする、異文化間能力の育成を主たる目的として発展してきた。異文化トレーニングでは、経験的学習を通じたより実践的な能力の育成が重視されており、国際理解教育・多文化教育・異文化間教育の教育目的議論において語られる、多文化共生社会に必要とされる能力観とも一致する（山岸、1995）。また、異文化トレーニングの手法は、他者とのコミュニケーション活動における普遍的な心理的要素の育成にも用いられている（八代・山本、2006）。このように、異文化トレーニングは、異文化間のみならず、様々な異質性により生ずる価値葛藤問題等の考察にも適用できる、汎用性の高い教育方法といえ

る。

しかし、異文化トレーニングの実践形態は、その多くが企業研修や言語教育において単発的・二義的に用いられ、教育方法から評価まで一貫した継続的な研究は十分に進められている状態ではなかった（小池、2000）。さらに、実践全般に関わる大きな問題として、時間的制限・人材不足の問題も挙げられ、それらが教育現場における継続的な実践研究を阻む要因と考えられた（加藤、2009）。

また、企業目的によるICTを用いた異文化トレーニングは存在していたが、その公開は少なく、教育現場における利用のための学術的な研究は見られない状況であった。

これを踏まえ、筆者は、工学分野との連携による学際的な共同研究^①として、Information and Communication Technology

(ICT) を用いた異文化トレーニング教育支援システム開発に取り組んできた。本システムは、これまで中心的に扱われることのなかった異文化トレーニングに特化して独自に開発した、自律型学習支援ツールである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ICT を用いた異文化トレーニングの理論的整備と実証的研究を行い、その有効性と課題について明らかにすることである。ここでいう有効性とは、ICT を用いた異文化トレーニングが、異文化コミュニケーションに関する知識と理解を深めるための導入として役立つかどうか、ということと、これまでの異文化トレーニング研究にて指摘されてきた、実践に関わる諸問題を、ICT を用いることでどう改善することができるか、ということを中心として行っている。本研究は、これまでの異文化トレーニングの流れを引き継ぎつつ、高等教育での実践に焦点化し、より教育学的な立場から、異文化トレーニング研究の理論的・実践的進展に貢献するものである。

3. 研究の方法

本研究は、以下の3つの方法によって進められた。

(1) 文献調査と面接調査による理論的整備
ICT を用いた異文化トレーニングの理論的整備のための基礎的研究として、ICT 上で特徴的な設問設定等の教育方法を、文献調査にて明らかにする。そして、その妥当性について、専門家への面接調査により明らかにする。

(2) 実践方法の研究

次に、(1) の基礎的研究を基に、ICT を用いた異文化トレーニング教育支援システムの実践方法についての研究を進めた。

具体的には、国内外の研究者・専門家を対象に実践を行い、専門的な知見を得ることで、ICT を用いた異文化トレーニングに特徴的な教育的機能の全体像を明らかにし、実践に向けての内容・方法・評価について追究した。また、小規模なパイロット研究を行い、ここで示された課題を基に、次年度の実践準備をした。

(3) 高等教育機関における ICT を用いた異文化トレーニングの実践

(1) (2) の研究を基に、実践研究を行った。そして、これまでの理論的・実証的研究から見えてくる、ICT を用いた異文化トレーニング手法の課題を明確にしようと試みた。

4. 研究成果

最初に、2010 年度の異文化トレーニング事例の資料・教育工学分野資料の文献調査では、通常の異文化トレーニングと ICT を用いた時の相違に焦点化して精査し、その体系的整理を行った。

次に、関連分野の研究者・専門家への面接調査を実施した。米国の異文化コミュニケーション研究所 Intercultural Communication Institute (ICI) では、オンラインによる異文化コミュニケーション教育を専門とする研究者、そして、日本では、異文化トレーニング実践経験が豊富なファシリテーターに対し調査を行った。さらに、教育工学分野からの補完もすべく、オンライン教育を専門とする教育工学研究者に対する調査を行う機会も得た。

調査では、ICT を用いた異文化トレーニングは、異文化に対する興味を喚起し、理解を深める教育方法の一つとして有効であるとの貴重な意見を得られた。これにより、設問設定と内容の妥当性に対してある一定の評価が得られたと考えられた。課題としては、①明確な目的に応じた内容設定、②有効なオンライン教育方法のありよう、③対象者に応じた評価方法の設定、以上の3点について、さらなる整備の必要性があることが明らかにされた。

2011 年度は、前年度の基礎的研究で明らかにされた3点の課題を整備しつつ、ICT を用いた異文化トレーニング教育支援システムの実践のための研究を開始した。

まず、研究者・専門家に対する実践と面接調査を行った。この調査においても、ICT を用いた異文化トレーニング教育支援システムは、異文化に対する興味を喚起し、理解を深める教育方法の一つとして有効であろうという肯定的な意見を得られた。そして、前年度の課題①については、筆者が実践可能な範囲での対象者を設定すること、すなわち、高等教育機関における学生を対象者と絞り込むようすすめられた。

さらに、前年度で示された課題②については、本システムを講義の「導入」として位置づけ、その内容を用いて、異文化理解に関する考察を深めるような授業を行うこと、すなわち、ブレンディッド教育の可能性について示唆された。

ここで、前年度で示された課題③について検討する必要性が出てきた。ブレンディッド教育による実践を前提とするのであれば、本来の授業内における評価が重要になる。そこで、授業における評価としての学期末試験結果を、本システムの実践における暫定的な評価の基準と設定することにした。

次に、パイロット研究として、高等教育における学生に対する試験的な実践を試み、教

育方法について検証した。

これまでの面接調査とパイロット研究により、本システムをブレンディッド教育にて実践することの重要性が示され、今後の実証的研究の方向性を見出すことができたといえる。

ここで、対象者を高等教育機関における学生とし、前年度に明らかにされた課題である、内容・方法・評価について、表1のとおりに暫定的に整理した。

表1 教育方法・内容・評価案

対象者	学生（異文化コミュニケーション関連授業受講生）
教育方法	ブレンディッド
内容	全部
評価	学期末試験

以上の案を基に、最終年度である2012年度は、高等教育機関における異文化トレーニング教育支援システムを、ブレンディッド教育方法にて実践した。

本実践の目的は、本システムの異文化トレーニングが、学生の異文化コミュニケーションに関する知識と理解を深めるための導入として役立つかどうかを探ること、実践に関わる、時間的制限・人材不足の問題・継続的な実践研究の不足の問題の改善の可能性について探ること、そして、今後の課題について明らかにすることである。

実践は、A大学の2012年度前期開講科目「異文化理解」受講生61名のうち、約半数の31名を対象に行われた。実践対象者・非実践対象者と二分した理由は、実践の効果についてより客観的に調査するためである。実践対象者は、ICTを用いた異文化トレーニングを自習した上で授業に参加し、非実践対象者は、ICTと同内容の課題をレポートとして自習した上で授業に臨んだ。このように、両者ともに同内容・同量の課題をこなすように工夫した上で、ブレンディッド教育を実践した。

調査対象は、実践対象者の学期末試験結果、Intercultural Adjustment Potential Scale (ICAPS) テスト結果、および紙面調査結果である。

まず、実践対象者と非実践対象者の学期末試験得点数の平均値を比べると、前者が70.8点、後者が59.4点という差が認められた。

次に、ICAPSは、実践の前後において学生全員を対象に実施された。しかし、実践前後の全体の平均値は、実践対象者・非実践対象者間を含め、有意差は認められなかった。

最後に、実践対象者に対する紙面調査では、学習への意欲を喚起できたかどうか、ということと、本システムが学習の理解を深めるこ

とに繋がったかどうかについて質問をした。いずれの回答も肯定的であり、100%の学生が肯定的な評価を示した。

実践対象者に対する調査に加え、実践に関わる諸問題についても検証した。最初に、時間的制限の問題については、本システムの異文化トレーニングの毎回の実践と、ブレンディッド教育による講義内容の充実という点で、問題を解消する1つの方法としての有効性が示されたと考えられる。

次に、本実践では、人材不足の状態では実現できなかったようなトレーニング数をこなすことが可能になった。本システムの存在そのものが、第2のファシリテーターのような役割を果たしたといえる。

そして、継続的研究が不足している問題については、本システムの作成開始から既に3年が経過しており、これまで数回の試験的実践による形成的評価を行ってきた。この時点で、既に継続的な実践研究が形成されつつあるといえる。さらに、今後の継続的な実践研究に言及するならば、本システムの回答結果が、電子的に自動収集され、半永久的に保存されるという点を活かした研究の可能性があると見えるだろう。本実践が終了した時点では、継続的研究不足問題の改善について明らかにすることはできないが、回答を簡単に蓄積できる機能は、今後の異文化トレーニングの改善のための資料や、調査研究の幅を広げる資料として、異文化トレーニングの継続的実践研究の実現を可能にするものと考えられる。

これまでの分析をまとめると、本実践研究の効果について、全人的な資質に及ぶ異文化適応能力を測定するICAPSで判断するには十分とはいえなかった。しかしながら、本実践の目的のうちの1つ、「異文化コミュニケーションに関する知識と理解を深めるための導入として役立つのか」という質問に対し、学期末試験結果と紙面調査結果は、肯定的な評価を示したといえるだろう。

また、実践に関わる諸問題のうち、本実践研究においては、時間的制限・人材不足の問題については、軽減の可能性が認められ、継続的な実践研究の不足問題については、今後も引き続き本システムの形成的評価を重ねることによって、さらなる継続的実践研究への可能性があることが示された。

ただし、これらの調査結果だけで、必ずしも本システムの効果について容易に結論付けられるものではないことに言及しておく必要がある。その理由として、異文化についての学習理解を深める要素は、他にも多様に考えられるからである。また、現段階では、このような調査結果が、学習者の異文化間能力を完全に保障するものではないことにも注意したい。異文化間能力とは、異文化接触

時に必要とされる包括的な能力を総称したものであり、本システムでの学習はその一部、異文化コミュニケーションに関する知識と理解をより効果的に深めることを目指したものであるからである。

また、本実践においては、ICTを用いることによる課題も浮き彫りにされた。それは、教師の役割の明確化の必要性、教育方法の継続的な研究の必要性、そして内容の充実を図る必要性である。

今後も、本実践を基盤とし、ICTを用いた異文化トレーニング実践における教育方法と、学習意欲の維持のための教師の役割と支援のありようを、引き続き整備してゆく必要がある。それをしなければ、学生の学習プロセスを十分に支援しているとはいえないであろう。

本システムの異文化トレーニングは、その内容の充実と実践的な研究の積み重ねが求められている、いわば発展途上中のシステムである。今後、誰もが簡単に利用でき、その効果の学術的な有意性が認められた教育支援システムとなることを目指し、さらに研究を進めたい。

最終年度においては、この実践研究の結果について、論文等の形で報告することができた。現在、関係する学会等において報告を重ね、多方面からの意見を汲み上げることで、本研究で明らかにされた課題に、どのような局面から取り組むかを探究しているところである。今後も、ICT活用教育と、これまで積み重ねられてきた異文化トレーニング研究の学術的意義の探究、そして異文化コミュニケーション学への貢献に繋がるよう、研究を進める予定である。

(注)

(1) 平成 21~22 年度福井県大学連携リーグ連携研究推進事業採択課題。課題名：「異文化交流分野におけるトレーニング事例のデータベース化と教育支援ツールの研究」、研究代表者：加藤優子、共同研究者：小倉久和*、黒岩丈介*、諏訪いずみ* (*福井大学工学研究科知能システム工学専攻)

(参考文献)

加藤優子 (2009) 「異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究：高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察」『仁愛大学紀要人間学部篇』第 8 号、13-21。

小池浩子 (2000) 「異文化間コミュニケーションの実践・応用」西田ひろ子編『異文化間

コミュニケーション入門』創元社 310-334。

八代京子、山本喜久江 (2006) 『多文化社会の人間関係力：実生活に生かす異文化コミュニケーションスキル』三修社。

山岸みどり (1995) 「異文化間能力とその育成」渡辺文夫編著『異文化接触の心理学：その現状と理論』川島書店 209-223。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

①加藤優子 (2013) 「ICT を用いた異文化トレーニング教育支援システムの研究：高等教育における実践について」『異文化コミュニケーション』、査読有、第 16 号、27-43。

②Yuko Kato (2011) Teaching and Learning of the Intercultural Training Program Using Information and Communication Technology in Higher Education in Japan. *The Asian Conference on Education Official Conference Proceedings*, 査読無、887-894。
<http://iafor.org/ace2011.html>

③加藤優子 (2011) 「高等教育における異文化トレーニング教育支援システム利用のための一考察：教師を対象にした面接調査より」『仁愛大学研究紀要人間学部篇』査読無、第 10 号、33-59。
<http://crf.flib.u-fukui.ac.jp/dspace/>

④ Yuko Kato (2010) Developing Intercultural Training Programs using Information Communication Technology in Higher Education in Japan. *The Asian Conference on Education Official Conference Proceedings 2010*, 査読無、331-343。
<http://www.iafor.org/ace2010.html>

⑤加藤優子 (2010) 「ICT を用いた異文化トレーニングの基礎的研究：高等教育における利用のための理論的整備に向けて」『仁愛大学研究紀要人間学部篇』査読無、第 9 号、1-9。
<http://crf.flib.u-fukui.ac.jp/dspace/>

[学会発表] (計 6 件)

①Yuko Kato (2012) “An Empirical Study of an Intercultural Training Program using

Information and Communication Technology in Higher Education in Japan.” The 19th International Conference on Learning.15 August 2012, The Institute of Education, University of London.

②加藤優子(2012)「高等教育における異文化トレーニングシステム実践の中間報告：ICTを用いた異文化理解を促進する教育の試み」日本国際理解教育学会、2012年7月15日、埼玉大学。

③Yuko Kato (2011) “Teaching and Learning of the Intercultural Training Program Using Information and Communication Technology in Higher Education in Japan.” The Third Asian Conference on Education, 30 October 2011, Ramada Osaka Conference Rooms.

④加藤優子(2011)「ICTを用いた異文化トレーニングの基礎的研究」異文化間教育学会、2011年6月11日、お茶の水女子大学。

⑤ Yuko Kato (2010) “Developing Intercultural Training Programs using Information Communication Technology in Higher Education in Japan.” The Second Asian Conference on Education, 3 December 2010, Ramada Osaka Conference Rooms.

⑥加藤優子(2010)「ICTを用いた異文化トレーニングの理論的整備に関する研究」異文化コミュニケーション学会、2010年10月31日、文京学院大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 優子 (KATO YUKO)
仁愛大学・人間学部・講師
研究者番号：90570614